

# 人間本性と形而上学

浅野 章

日本大学大学院総合社会情報研究科

## Human Nature and Metaphysics

ASANO Akira

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

Aristotle opens his great work, *Metaphysics*, with the simple observation that ‘All humans, by nature, desire to know.’ His saying shows that relations between human nature and metaphysics have significant meanings, too. In this paper, problems between them drain for discussion.

---

### 1. はじめに

形而上学は人間本性の現れである。知ることを欲する。これが人間の本性である。形而上学と人間本性とのかかわりを改めて問うこととする。

### 2. 人間本性について (一)

人間本性つまり人間をして人間たらしめているものは何か。それを欠いては人間とはいえないもの、それが人間の本性である。本質とはそれを欠いてはあることも考えることも出来ないものといわれる<sup>1</sup>。

人間本性の問いについて答えは多様である。人間本性という以上、それが多様である、と言うのは、本性の語義に適していないのではないであろうか。

人間本性への問いは、人間観として現れる。古来、洋の東西に亘って、人間についてはそれこそ様々に言われてきた。その一つ一つを採り上げる余裕はない。またその必要もないであろう。人間と自然との関わりについて、人間とは何か、人間にとって何処までが自然であるのか、一見自明のように見えて、その実、如何に不分明であるのか。

人間観の多様性は、人間を規定する要因によっているであろうことは容易に想像される。その意味において、人間観もまた歴史の産物の一つである。したがって、時代、社会、などを背景とした文化的現象であるといつて過言ではないであろう。

細かな例示はさておき、古代ギリシャにおいては、典型的な人間観として挙げられるのは、周知の通り、プラトンによる人間観である。それは同時に社会観つまり国家論の展開でもある。人間としては、その構成上より、利益・意気地・知恵、つまり、肉体的欲望を基礎として、精神的な勇気、さらに、その上に、というより、最高に位置するものとして知恵が置かれている。これらに対応するものとして、商人・軍人・哲学者=政治家が構想されている。三者の均衡は正義によってなされる。プラトンの四元徳説である。

プラトンの説の真髄は、イデアにある。したがって、イデアにおいて人間の本性が明らかにされていると見なければならないであろう。つまり、イデアにおいて示された人間が人間の本性ということになる。いわば人間の典型像である。しかしプラトンは、これを端的に示しているとはいえない。確かに人間の構成を分析してはいる。もとよりそれらについての、概念の確立、これが、ソクラテス=プラトンにおける不朽の功績であることはいうまでもなく、それらが確立されているにしてもである<sup>2</sup>。

もっとも、人間の理想的なあり方として、現実には実在人物として、ソクラテス<sup>3</sup>が考えられている。しかし、イデアの観点から、この世をイデアの影と見る見方に立つものでないことは断るまでもない。

プラトンのイデア説に批判的であったその弟子ア

リストテレス、後世に計り知れない影響を与えたアリストテレス、その人間本性に対する見方に当然触れておかななくてはならない。

端的に記すなら、*animal rationale*すなわち理性的動物として人間本性を示すことが、アリストテレスの場合できるであろう<sup>4</sup>。ここに人間についての、ヨーロッパ伝統の人間観の始原ともいべきものを指摘し得るといっても過言ではない。近世においてはパスカル<sup>5</sup>によって徹底して、簡明な言葉の中に印象深く述べられていること、あるいは、まさに現代において、人間観そのものが、現代文明を背景にして深刻に問い詰められているとき、その規準として、打ち出されているのも人間における知の位置である。思考能力、ここに所謂人間を巡っての線引きがなされている。医学における科学技術の進展は、二十世紀前半には想像することのできなかつた人間を存在させるに至った。それに呼応して新たな学問の誕生になった。生命倫理学である。しかし、そこにおいて決定的とも言うべき規準を提供したのは、古代ギリシャに始まる人間本性についての見方であった。もとより、人間観は、ヨーロッパの伝統に従わねばならないということはない。脳死を巡ってなされた死の判定についてのわが国の対応が、妥協の産物として法制化せざるを得なかつたことは、記憶になお新たなものがあるであろう。

いずれにしても科学において人間を規定するもっとも典型的な例は、生物学における分類上の位置づけである。*Homo sapiens*、リンネによる命名の中に端的に示されている。これに対して、*Homo faber*あるいは*Homo ludens*などという記名も生じているが、それらを可能にせしめるのが何であるかを思うならば、少なくとも本性として *Homo sapiens* が相応しいことは断るまでもない。

この点を顧みるとき注目されるのは、ヨーロッパの伝統と一口に言うことのできない性格の人間観を、中世という時代に、古代には経験したことのない規模のもとに、新たに生むに至ったことである。

それを一口に言うと、知に対する信である。プラトン以来人間において最高の位置に置かれていた知は、ここにいたって、つまり、キリスト教の出現と普及により、最高の位置を信に譲った。知は信に仕

えるはしたため(婢)の位置に転落した。もっとも、数世紀に及ぶ中世において、両者の関係は単純ではなかつた。中世最大の学者といって過言ではないトマス・アクィナス<sup>6</sup>の場合は、知と信との関係を部分的に重なる等しい円に例えることができる。そうであつてなお信仰により高い位置を与えている点を見るならばやはり中世ヨーロッパの人間本性が如何なるものであつたか、思い半ばに過ぎるものがある。この点、信仰中心のキリスト教思想を崩壊に導く役割を果たしたオッカム<sup>7</sup>にしても、変わるところはない。オッカムのキリスト教に対する信仰に揺らぐところはなかつた。

中世における人間観として注目されるのは、古代ギリシャにおける人間観をより徹底した点である<sup>8</sup>。これは、人間の位置を、神と動物との中間に位置せしめることによるものであり、神中心のキリスト教の信仰がヨーロッパ全域に及んで初めて可能になるものであつた。もとよりこの見方は十分に注意する必要がある。神と動物との中間といつても、ルネッサンスにおけるそれとは決定的に異なる<sup>9</sup>。この点はいくら強調しても、しすぎることはない。中世すなわちキリスト教においては、人間と神、また人間と動物、それらの間における差異は測り知ることのできない懸隔のもとにある。

人間の定義として、類概念に種差を加えることにより、動物に理性として、理性的動物としても、なおそこには、人間本性を的確に言い得ていないものとして、むしろ人間を下から規定するよりも、上から規定した方がより人間にはふさわしいという見解も出されるのである<sup>10</sup>。進化論などの生まれる余地はさらさらない。

人間と神との差異にいたっては、動物などとの差異ではない。創造者と被造物の違いである。到底両者は比較の対象にならない。ただ言い得ることがあるとすれば、神に似せて人間を作つたという点であろう。もとより、キリスト教における人間観の核心ともいべきものが、墮罪つまり原罪にあること。これを看過してはキリスト教について何を論じようと所詮は空しい。現世における一切はここから出発しなくてはならない。しかし当面の課題は宗教ではない。人間本性としての罪の側面、見るものによつ

ては側面ではなく根底であるというであろうが、その面を指摘しておくにとどめる<sup>11</sup>。もっとも、キリスト経においては、人間本性に即してこそ罪は深刻に問われなければならない。自由意志の問題である。神と悪とのかかわりであり、救済における神と人との関わりをめぐる問題でもある。

ルネッサンスから近世にかけての人間観についてはすでに触れたが、特に注意しておきたいことを加えておく。ルネッサンスの語の意味するように、古代ギリシャ文化の再生とは言っても、新たに興ってきた自然科学の発展の影響を、近代の人間本性の見方に及ぼさないということは考えられない。事実、近代哲学・思想の父とも呼ばれているデカルトのうちにそれを認めることができる。それも端的に述べることが許されるとすると、因果律による見方である。いうまでもなく、因果的にものを見るというのは、自然科学の基本的な態度である。原因があれば必ず結果を生じ、結果があれば必ずその原因がある。今日誰もがこれを疑わない。まさに科学的見方が常識となったことの証左である。デカルトはこれを徹底した。

Cogito ergo sum 哲学に関心のあるものなら知らぬもののないこの言葉。考えている、それ故、私は存在する、というより、考えているそのことがそのまま私の存在の証明になっている、という。デカルト自身の言葉によれば、この発見により、あらゆる懐疑から抜け出て、確実な基礎を知に置くことができた。ここにおいて、人間本性を探るならば、何よりも、その出発が懐疑にあったことである。中世から近世への一大転換を見て取ることは容易である。信の崩壊である。「先ず、信ぜよ」から「先ず、疑え」への転換である。断るまでもなく、デカルトの懐疑は、懐疑のための懐疑ではなく、真の知識の基礎の探求を目指す方法的懐疑であった。方法的というが、デカルト自身の述懐するところによると、命がけの思索であった<sup>12</sup>。

デカルト哲学の方法論が、確実な原因によって確実な結果を求めようとしている、因果律によるものである。後年、窮極するところ、自然の斉一性 Uniformity of Natureに、J・S・ミルが帰している帰納法の徹底にも見ることが出来よう。いうまでもな

く、コペルニクスに端を発し、ケプラー、ガリレオ<sup>13</sup>へと発展した天文学、それに基づく宇宙論を踏まえ、幾何学をモデルとして、デカルトの思索がなされている。デカルト哲学は自己原因としての実体の演繹的展開であるが、因果律を真髄としている自然科学の発展を背景としていることは<sup>14</sup>、デカルト自身自然科学に対する興味の旺盛であったことから容易に推察される<sup>15</sup>。

知的探求の面に限って言えば、古代ギリシャの特に、アリストテレスにおいてその典型を見出すことが出来る。古代と近世近代との相違、それを因果律の重視において見るができるように思われる。そのもっとも端的な例は、カテゴリーにおいてこれを取り入れているか否かにある。さらにその採り上げ方にある。確かに、アリストテレスは、形相因、質量因、動力因、目的因という四因を形而上学の重要概念としてあげ、考察している<sup>16</sup>。

この四因の意義は今日といえどもその重要性を失っていない。むしろ考察の基本概念として重要性を加えているといったほうが適切であろう。しかし近世以降の自然学との決定的な相違は、その因果性の徹底性にある。この点アリストテレスの場合、目的因の重視のため、徹底性を欠いている。これは、アリストテレスもすぐれた自然科学者ではあったが、生物学に、より比重を置いていたためと思われる<sup>17</sup>。したがって、あくまでも因果そのものを追求しようとする、いうなれば動力因に重点を置く近代自然科学とは自ら性格が異なってくるものと思われる。しかし、アリストテレスの考え方を柔軟に取れば、近代思想に十分生かされているという感を抱かざるをえないものがある。

因果律の異なった適用として、充足理由律をあげることができる。いうまでもなく、ライプニッツの案出になるものであり、ヴォルフ、特にショウペンハウアーによって主張され展開された<sup>18</sup>。

知に重点を置く人間観は、近代において、啓蒙主義において最高潮に達すると見ることができる。その端的な例が、カントの訴える一言である。Sapere aude! 「ただ知れ」。「賢かれ」、と訳している例もあるが、問題は、その人の知ろうとする意欲を喚起するにある。依存状態を断ち切って自立せよ、とい

うのである。ここから、Autonomie、autonomy の思想、自律の精神が自ら生じてくる。カントのこの思想こそ、今日、生命倫理において第一位に位置されている原則なのである。この思想の根底をなしている人間観が理性である。ロゴス的としての人間である。古代ギリシャ以来西欧を貫いている人間観である。sapere の訴えは、Sapiens を種差とする類的存在者に共通して訴えているわけである。

歴史（時代・社会）を背景にして、人間本性を規定しようとする試みがなされているが、基本において知に置かなくては成り立ちようがないと考えられるが、主知主義のみではなく主意主義が主張されていることについても断るまでもない。さらに、人間と言ってもそれを単独者として見るか、社会的存在として見るかということで、人間本性の捉え方に大きな差異が生ずる。特に、近代以降産業革命により、人間本性といわれるものに、どのような影響があるのか、あるいは、その捉え直しを迫られているのか、が問われる。

この問題の提起において、人間の見直しがなされたといってもおかしくはない。産業革命から資本主義の発展、人口の集約化、大量の失業、国際間における市場の争奪、世界大戦、死と不安が日常を襲うと、改めて人間本性とは何かが深刻に問い返されざるを得ない状況を現出する。人間観の変遷である。社会的動物としての側面が強調され、社会環境によって支配される存在と看做される。このような人間観が、自立を説く啓蒙思想と如何に関わるか。新たな問題の提起となる。この点において、新カント派の立場は興味を惹く<sup>19</sup>。

最初に触れたように人間本性は、一様に論ずることのできない性格を持っていることが明らかになる。現代におけるその一端に触れる前に、人間本性についての考察と深く関わる形而上学とについて、これを改めて見直してみることにしよう。

### 3. 形而上学について

#### 3.1 形而上学の運命

形而上学の来歴を問い、その現状に目を止める。単に形而上学の歴史と記さない理由である。しかし、そうは述べても、事は簡単ではない。小論の性格上、

概観というより瞥見に過ぎないことは致し方ない。

形而上学について、その受け取り方は人それぞれであろう。おそらく一般の世人にとって、この言葉の由来の古さから見て、学という名のつく所謂学問の中でこれほど馴染みのないものはないのではなからうか。新興の科学の中には、耳新しさのため理解できないものもあるが、形而上学は二千年をはるかに超える歴史を持っているにもかかわらず、といっても、日本の場合は、高々百年余りに過ぎない、この語の誕生ではある<sup>20</sup>。それでもなお他の学に比べるならば、結構な年数を経ているといつてよいであろう。それにもかかわらず、一般の市民には極めて縁遠い言葉といつて過言ではないであろう。

多少とも哲学の知識のあるものにとって、形而上学が存在に関わる学問であること、それも形あるものとしての存在ではなく、見たり触れたりすることの可能な感覚的な現象を超えた、つまり、経験を超越している問題を扱う学問である、として、一応解されているものと思う。その意味から誤解を恐れずに端的に表すと神学ということになるであろう。

このように述べて要約してみると、哲学、形而上学、存在論、神学となる。形而上学が何であるかは、これらの学問とのかかわりにおいて明らかになる。というより、形而上学は、ほかならないこれらの学問でもあるのである。もとより、形而上学についても、その歴史の重みに応じて、様々な解し方があるのは断るまでもない。

形而上学の由来については、定番となっている、ロドスのアンドロニコス<sup>21</sup>による、アリストテレス著作集編纂にまつわる特殊事情、それがそのままこの語として定着した、という説がある<sup>22</sup>。自然学あるいは物理学physikaの後metaに置いた著作という単に配置のみを意味するmetaphysika。これを、全くの偶然としながらも、metaに背後、さらに超える、超越の意味を持たせ、自然学を超える学、つまり、形而上学の誕生を見るにいたった。この学の運命にとって決定的ともいえるのは、中世におけるキリスト教との邂逅がある。信は知に勝るとしながらも、キリスト教に学的な基礎を与え、学として体系化していくに当たって、形而上学は格好の位置にあった。これまで、形而上学と呼んできたが、もとより、ア

リストテレスの呼称ではない。アリストテレスは、勿論ギリシャ語で *on hē on*, 存在者としての存在者の探求として *prōtē philosophiā* すなわち第一哲学としている。この第一哲学は、存在者である限りの存在者を扱う存在論<sup>23</sup>と神学から成っている。神学といってもキリスト教の神とは全く異なる。しかし、学の形成上測り知れない影響をあたえる力を持っていた。この点については、第一哲学のみではなかった。まさに、アリストテレスは万学の王であった。一々アリストテレスの名を上げる必要はなく、単に学者といえば、中世においては、アリストテレスを指していた<sup>24</sup>。

時代の変遷は、アリストテレスの権威を揺るがし、これを抛る方向へと進んでいく。ほかならぬ、形而上学もまたそれと運命を共にする。とは言え、形而上学の命脈が絶たれたわけではない。この点に留意しておきたい。

既成の学問に飽き足らぬまま、当時最高の教育を終えて学院を出たデカルト、そのデカルトが、またデカルト独自の形而上学の建設に努めた。デカルトの形而上学は、もとより、アリストテレスのそれとは異なる。異なりながら形而上学といわれるのは何故か。そこに形而上学の学的性格がある。まさに *meta*—、これである。これとは、背後に対する着眼、根底を極めようとする知的探究心、原理、始原なるものへの関心、である。さらにその確固たる基礎の上に学の体系の建設が目指される。

形而上学の辿る運命は、デカルトの形而上学をも揺るがし、これにつらなる形而上学を独断的の呼称のもとに抛り去ろうとする。

断るまでもなく、イギリス経験論の影響を受けて、独断の微睡から覚められたカントにおいて、形而上学はその俎上に載せられる次第となる。

### 3.2 形而上学とカント

カント以後、形而上学について、これをまともに採り上げることは無意味である、とさえ思われる風潮を生ずるに至った。まさにあらゆるものを破碎するカントである<sup>25</sup>。

しかし、カントにおいて、形而上学は一般に見られているように冷遇されていたのであろうか。カン

トに即して考えてみなくてはならない。

カント全集を紐解いて一見直ちに目に付くことは、カントの並々ならぬ形而上学に対する関心である。

カント哲学は大きく二つに分けて考えられている。批判前期と後期である。カントにおいて、形而上学はその生涯を通して、高い関心を持って扱われている。もとより、そのことによって、形而上学批判の意義が減殺されるというのではない。1781年、『純粹理性批判』が世に出るまで十年余りの期間、当然、学としての形而上学が疑われていたわけであるが<sup>26</sup>、伝統に即した形而上学の講義は続けられている<sup>27</sup>。

また、何より強調されてよいことは、単に批判するというのではなく、『学として現れうべき将来のあらゆる形而上学への序説(プロレゴメナ)』(1783)が刊行されていることである。二年前、世に出た『純粹理性批判』の難解さに辟易している世人に、理解しやすいようにとの配慮から執筆された書ではあるが、カントの形而上学に対する真意をほかならぬ書物の表題に示している。注目すべきことである。改めて、形而上学に関するカントの関心のほどを、著作のなかから拾ってみる。

すべてを破碎するカント。カントの前には如何なる学説も、その批判に耐えることはできない、という嘆声をこの言葉から聞き取ることは容易であろう。それまで、学の内学として、万学の女王の輝かしい位置を占めていた形而上学は、折しも勃興してきた自然科学の勢威に押されて、哀れな老女の地位に甘んじなければならなくなった。カントの一撃、『純粹理性批判』の出現によって、この老女の命脈は絶たれたかに見えた。

しかし、一撃を加えた当のカント自身の言葉は、決して形而上学を無用のものとするものではなかった。将来の形而上学のために、のうちに読み取ることが出来る。より正確に言うと、純粹理論理性批判は純粹実践理性批判の出現を促し、形而上学本来の意義を實踐理性すなわち道徳の基礎付けにおいて真に發揮させようとした。したがって、『*Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*(1785), *Metaphysik der Sitten*(1797)は書かれるべくして書かれた書である。もとより、カントの形而上学に対する関心は、単に實踐理性の領域に甘んずるものでは

なかった。この点、新カント学派は余りにカントを狭く扱い過ぎたといわなくてはならない<sup>28</sup>。遺稿集の表題『自然科学の形而上学的原理から物理学への移行』*Übergang von den Metaphysischen Anfangsgründe der Naturwissenschaft zur Physik*<sup>29</sup>、に端的に見られるように、形而上学に対する、カントの関心は、カントの生涯を通して、そこに劇的な変容を見せながらも変わることはなかった<sup>30</sup>。

### 3.3 近代から現代へ

カント以後の形而上学の運命が問われる。カント哲学は一つの時代を画する大きな意義を哲学史の上に残したが、また、物自体という明らかに形而上学的な課題を残しもした。もとより、これは理論理性にとってのことであり、実践理性あるいは判断力にとってはそれなりの解決を見ているのであるが、やはりたとえ理論理性のことというより、形而上学は何より理論を重視すべきことは、それなくしては、その存在の意義を失ふといえる形而上学の存立に関わる問題でもある<sup>31</sup>。

ところで、ややもすると、新カント派の出現、十九世紀後半（1869）以降、形而上学を軽視する風潮を生じ、といっても、特に新カント派にすべてを帰せしめようというのではない。このことは、断るまでもなく、当時の社会的背景、あるいは、学界の状況から推して、所謂形而上学がいかにも時代遅れの感を抱かしめた点も考慮しなくてはならない。コントの実証主義、マルクスの弁証法的唯物論などの形而上学に対する評価を思い見るなら、何人も肯わざるを得ない一面を看取するであろう。

近代思想に計り知れない影響を与えたダーウィニズムの成功が、豊かな実証性と社会的背景（すべての領域において、指導理念と体系の樹立を求めている発展期の産業資本主義）の下に、ダーウィンによってなされた。コペルニクスが天文学において果たした世界観（宇宙論）の一大変動を、ダーウィンは生物学の立場から地上における人間中心の思想に一大変革を迫ることになった。共にキリスト教と激しく対立する。当然、形而上学にも深刻な影響を与えたことは想像に難くない。与えたというより今もなお与えているといった方が適切であろう。もとより、

形而上学は直ちにキリスト教ではない。しかし、西洋においては世界観、人間観について、近代といえども、キリスト教とのかかわりを見捨てることはできない。今もなお、と記したが、この点については以下の章において触れることとなるであろう。当面注目すべきことは、形而上学の運命に与えたダーウィニズムの影響である。

これを端的に言う、「実証主義の時代潮流の影響下で、そもそも人間とは何かという問いが、ついには哲学の視野から消え失せてしまったにしても、不思議ではなかった」<sup>32</sup>、という述懐の中にそれを見ることが出来る。その理由は、人間とは何かという大きなテーマが個別科学の中に分散してしまったからである。個別科学として、生理学、心理学、医学、社会学などが挙げられている<sup>33</sup>。確かに、今日、人間とは何かと問われて、それが、身体的・精神的・社会的存在である、と答えることが、もっとも妥当な見解であると一般に看做されている<sup>34</sup>。それぞれの専門科学において研究がなされる、それも実証主義に即するに従って信頼性を得るという性格を持っている。これをもって、能事終われり、とすれば、先に記したように形而上学は無用である。

しかし、いわばこのように特殊化した専門領域のパースペクティブの分散の寄せ集めから人間を把握することが可能であるといえるであろうか。形而上学の存在が顧みられる所以である。

もとより、進化論を積極的に評価して、新たな形而上学の創設に進むことも考えられる。事実、その例を挙げるまでもなく周知の業績もある。さらに思想界において、時代の背景を、いかにも顕在化していると思わせるのが、所謂、生の哲学といわれるものの興隆である。まさに理性の位置はすでに時代遅れの観を抱かしめている。これを形而上学の立場においてみると、明確な問題意識を形成してくる。生とはその根源において、衝動であり意志である。理性によって支配される意志から、意志に仕える理性への転換である。

## 4. 人間本性について（二）

人間が置かれた環境に依存するという見方は、新しいものではない。しかし、実験心理学の進歩はこ

の見方を極端に推し進めようとしている。条件付けによって、人間をどのようにも形成することの可能を主張してさえいる。スキナーはその代表の一人である<sup>35</sup>。

行動心理学と呼ばれるこの分野で、ワトソンほど<sup>36</sup>ではないにしても、人間の自由意志を認めず、環境の諸条件によって人間の行動が決定されると主張しているパラダイムは同じである。動物実験による結果から導き出された主張は、「科学的」であるとして高く評価されている<sup>37</sup>。それにもかかわらず、動物それもヒトに近縁な高等動物ではなく、キジウハトの例からの類推であることは、訴えを弱くしていると指摘されている<sup>38</sup>。

この点、同じく動物の観察から独自の説を展開して注目されているローレンツ<sup>39</sup>の場合は、それが、人間の本能についての主張であるだけに、まさに人間本性そのものに直面しており、いろいろな意味で関心がもたれる。一つ一つを吟味している暇はないが、人間の本能にかかわる研究というと直ちに想起されるフロイトの精神分析との関連、また、人間本性として自由意志の占める位置は必ず問われるが、それとの関わり、さらに、形而上学的視点において、人間を問題にするのであるから、その視点において問われねばならない個と全、すなわち、個体と全体、個人と社会の問題が提起される。

周知のように、ローレンツは本能として、摂食、生殖、攻撃、逃走の四つを挙げており、中でも攻撃本能を重視する。注目されることは、この本能が動物の種の維持の働きをしていることである。ここには明らかに進化論の影響を見て取ることができる。Struggle for Existent である。個体間における殺しあいは動物には見られない。この点、人間においてはその歴史が示すように悲惨な戦争はその度を加えて止むことがない。この本能に衝き動かされて、知性はそれに仕え、意志はそれを恣にしようとする。

ローレンツの主張の弱点も、その観察例が人間から離れた動物からの推論である点にある。しかし、人間本性について考えさせるものを提示していると思わせるのは、いかにも本能と呼ぶにふさわしい面を、人間は今日もなお、文明開化を誇りながら、その根底に隠し持っていることを暴き出してみせた点

にあるといえよう。

ローレンツを含む現代における人間についての学説、これを人間論と端的に呼ぶなら、現代人間論において労作を発表しているのは、A.ゲーレンである<sup>40</sup>。ゲーレンにおいて問われる人間本性つまり人間とは何か。現代生物学、特に形態学の立場からゲーレンはこれに迫る。比較解剖学、考古学、主として化石を通して、また発生学から内分泌学へと、現代科学の成果(文献)にあくまで忠実に依拠しながら、考察を進めていく。そこで批判されるのは、単純な類人猿から人類への進化論である。つまり低級なものから高度なものへと進展していくという見方であり、人類は他の動物には見出すことの出来ない最高位置にあるという見方、この見方に対する否定である。「欠陥動物」<sup>41</sup>、形態学的に表すところなる。人間は「未確定」であり、今なお自分が自分の課題であり、世界開放的な状態にある<sup>42</sup>。そこにおいて人間は非動物的な過剰刺激にさらされており、その負担から免れることによって、つまり、負担免除を全うすることによって、「自己の生存の欠陥条件を自力で生存のチャンスに切りかえるほかはない」<sup>43</sup>といわれる。人間本性について、衝動の理解は重要な意味を持つ。ゲーレンは衝動を、二つの反対方向を基本特徴とするとして、一方において、自然本性上可塑的であり、即物的臨機応変的であるが、他方、抑制能力を持つと見る。この見方は、人間本性の全体像を、生まれながら行為を頼みの綱としている生物としての人間の見方から来ている。前者の故に、ゲーレンは人間を、状況に条件付けられるのではなく状況に即応するとしている<sup>44</sup>。この両者の間の空隙が重要である。衝動の持つ欲求と充足および活動する行為、この間の空隙によって、「内部を開放する決定的状態になる」<sup>45</sup>。衝動に関連して意志に触れておく。人間本性にとって意志の位置づけは看過し得ないものがある。ところが、ゲーレンはこれを無視する。古代ギリシャにおいて哲学者たちは、意志能力は存在しないという考えを持っていたというところから来ている<sup>46</sup>。アリストテレスはその代わりに「考え深い欲望」を想定しており、欲望に関わる悟性にその指導効力(先導するものHegemonikon)が帰着されるとして、これこそ肝心の要であるとして

いる<sup>47</sup>。ゲーレンもまた意欲を高く評価し、それは指導効力として、「非特殊化かつ未確定の、負担免除され、自己自身が主題となる一生物がなす行為の構造であり」<sup>48</sup>、とし、さらに、「人間は、その生活を導く生物であるから、この性質は本性の全幅にわたって顕著であるほかはない」<sup>49</sup>と説いている。ここから、「意志」という特別仕立ての能力は、人間の内なる人間の異名にほかなるまい、この故に意志として特に論ずる、つまり、別置しなかったとしている。さらに、「それは意志を見くびっているからではなく、人間の普遍的本性とみなしているからであり、人間は訓育生物であり、未確定且つ自己自身にとっての課題であり、生を生きるのではなく導く — これらの言葉は、すべて人間は本性から意欲するものである」<sup>50</sup>、として、ゲーレン自身の人間観を繰り返し強調している。

ゲーレンにおいて人間本性は、哲学の立場から一見すると見ていないようであるが、ゲーレン自身も断っているように、根本は哲学から見ている<sup>51</sup>。したがって形而上学において人間が問われていたということもできる。というよりそれが形而上学本来の姿であるといった方が適切であろう<sup>52</sup>。改めて両者について述べることにしたい。

## 5. 人間本性と形而上学

### 5.1 人間の位置

人間本性について述べるのが、そのまま人間の形而上学における位置に関わる。その意味から、人間への問いは形而上学についての問である。このように解された形而上学は、存在論の立場からあらゆる存在するものについて、構造的に構想されていることが理解される。その端的な例は、形而上学を、神、人間、自然という三つのカテゴリーのもとに構想して考えようとするものである。

カントが『純粋理性批判』において、純粋理性の直面する矛盾として取り上げている三つの問題もまたこの例に漏れるものではない。宇宙の始原もしくは有限か無限か、あるいは、自由と必然、さらに、神の存在をめぐる問題などは、そのまま三つのカテゴリーに対応している。これらの問題は、カントが案出したものではなく、形而上学として教授されて

きたものである<sup>53</sup>。自然科学が実証的な成果を挙げて進展していくのに対して、形而上学は、文字通り経験、それも単なる個人的な経験ではなく、何人も共通して感覚することのできる経験にいわばその証拠を提示して同意を得るという実証性を欠いている。つまり、言うところの空理空論を弄んでいるとして、世人の嘲笑を買い無関心の帰結をとらざるを得なくなっている。これは何も現代の話ではなく、すでにカントの時代において見られた一般の風潮であった<sup>54</sup>。カントの性格はこの風潮に馴染むことを潔しとしなかった。この一点に注目するならば、カントによって形而上学は否定され、いわば思想史の博物館に収められているものに過ぎないという見方をするものがあるとするれば、それはとんでもない思い違いといわなければならない。もとより、カントの生涯が示しているように、自然科学あるいは数学論理学についての知識と研究心、それらと形而上学についての並々ならぬ深い関心、この両者の、ある意味における相克のもとにおける苦闘の産物が、『純粋理性批判』であるということも許されるであろう。ここに自然科学というのはその典型がニュートン物理学であることは言うまでもないが、カントは生涯を生地ケーニヒスベルクから一歩も出たことがないに関わらず、自然科学はもとより当時の世界の事情に驚くほど通じていた。その著作によっても瞥見することができるし、カントの知人の述懐するところでもある。

当面は、形而上学の構成分野を知ることにある。カントを通して見られるように、神、人間、自然の三領域に関わっているのが、形而上学である。

もともと、カント自身がこのように述べているのではない。形而上学についてはそれぞれの研究者によって見方も異なる。しかし、その性格を大きく見るとき三領域にまとめられる。またそのほうが明確に理解することができるように思われる。この点については、レーヴィトの説くところが参考になる<sup>55</sup>。

当然、事柄を問題にする際に、問われるその事柄の始原、つまり形而上学の由来において、この三分類が問われるであろう。アリストテレスにおいて、第一哲学と呼ばれていたものは、存在者である限りの存在者を扱う、所謂一般存在論と、最高存在者で

ある神を対象とする特殊存在論によって構成されている。ハイデガーの言うところのOnto-Theologie存在一神論である<sup>56</sup>。ここには、特に人間と自然の区分は見られない。この区分が明確にやかましくなされるのは、キリスト教とのかかわりを形而上学が持つことによる。神については言うまでもない。

デカルトにおいて、深刻に問われた一つが、所謂心身問題であることを想起すれば、神、人間、自然の三分説が典型的に妥当すること、またそれ故に機械論的自然観を生じ自然科学の、言うまでもなく人体を含む科学の発展をうながしたことは指摘するまでもない。この思想が、現代生命倫理に大きな影響を与えている点についても同様である。

形而上学における人間の位置については、二十世紀に入ると大きな関心の的になるが、よく知られた研究者としてシェーラーがある<sup>57</sup>。シェーラーの見解として注目されるのは、人間を神と動物との中間に位置する存在者として、これをいずれの方向により近似しているとするか。動物よりの方向つまり「下から」と見るか、あるいはむしろ、神のほうにより近いと見るか。これは「上方から」ということになる。この見方が、進化論を向こうに回した発想であることは容易に想像できる。動物から人間への距離、その隔絶的とも思える隔たりの述懐である。もとより、この見方も人間観の一つであり、反発のあることはいまでもない。シェーラーにしても人間を動物としては未完の存在であるとしている<sup>58</sup>。そこに人間の本質が、また、見出されてくるのである。

## 5.2 人間の構造

形而上学は存在者である限りの存在者を問う存在論である、ここに存在者の階層構造が考えられる。物質—植物—動物—人間—天使—神。これは、一つの古典的な形而上学における存在者の関係を示したものである<sup>59</sup>。天使は叡知的存在と考えられる。これらが重層構造をなしている。

このいわば客観的存在構造、これを人間の主体的な面に適用してみると、そこに人間の構造が示されてくる。人間において、構造というと、先ず思い浮かぶのは人体解剖図であろう。事実、解剖学において、命名の中にそれを認めることができる。自律神

経が意志の支配下でないところより、神経自身の自律と看做され、これを植物性とも呼んでいる。植物人間については、人間の構造面からの端的な表明として、一般化されている。

形而上学における人間観を基礎として、心理学の分野において興味ある見解を發表している例を、マスローにおいて見ることができる。

形而上学は、その学の性格から、困難な問題に立ち向かうように運命付けられている。この点については先に指摘したとおりである。問題として、容易に挙げることのできるものに、一と多、全体と部分、無限と有限、絶対と相対、普遍と特殊、・・・などがある。さらに、形而上学は、その名称の由来から生じた学としての特異性により、それらのかかわりにおいて、多よりも一を、部分よりも全体を、相対よりも絶対を、特殊よりも普遍を、重く見る。このように見てくると、存在者より存在を、存在より無に形而上学的探求が向かおうとしていることも理解されるであろう<sup>60</sup>。

全体の重視が、時の社会情勢とあいまって、重大な社会思想を生み出す基盤を提供する例を指摘することもできる。全体主義思想の根拠付けであり、個人主義に立脚する自由主義陣営から徹底的に批判されたことはなお記憶に新たなものがある。しかし、形而上学の学的業績としては評価されている<sup>61</sup>。

然るに、人格における個性の強調が二十世紀思想を強く染め出してくる。生の哲学であり実存の思想である。ニーチェあるいはキレルゴールの思想を直ちに形而上学であるとするのは暴論であるにしても、その発想において、また、思想の構想について見るとき、形而上学的であることは紛れもない。生命哲学として知られるディルタイ、あるいはオイケンにおいては、前者は精神形而上学の先駆者と呼ばれており<sup>62</sup>、後者は精神生命の哲学を説いて明白に形而上学の主張をしている<sup>63</sup>。

## 6. むすび

人間本性は人間が人間である人間の本来性である。これを欠いては、人間は人間でありえない。人間の本質である。しかし、人間本性という語の示すように生来人間であれば誰もが持っているものでもある。

本性すなわち Nature.の示すように、生まれながらに備えているが、それがそのまま、人間の本質と呼ぶことができるか否か、そこに重要な問題がある。

この問題の重要性を形而上学に即して考えてみた。「形而上学は人間の本性に属する」<sup>64</sup>、ハイデガーの言葉をもって結びとする。

<sup>1</sup> スピノザ\*『エチカ』上、畠中尚志訳、岩波文庫、1998、93 ページ。\*Baruch de Spinoza(1632-77)。

<sup>2</sup> 「思惟、意気地、欲望」のどの「要素が支配的かによって三様の人間ができる」。対応する人間の望みは「知識、成功そして利益である」。これら三要素について、どの要素が支配的であるべきかについて、プラトン\*ははっきりした見解を持っている。知性によってのみ知りうる窮極的な実在として形相を考える彼の立場から予想がつくように、意気地および欲望の両者を支配すべきものは思惟である。「魂の各部分はそれぞれの適した役割を有しており、人間にとって理想的なことは、魂の三つの要素が思惟を中心に調和した一致をみていることである。この理想的の状態をプラトンはギリシャ語でディカイオシュネー(dikaioisune)と表現している」。正義 justice と一般に訳しているが、「正確に英語に訳すことはできない」。(L.スティーブンスン\*\*『人間本性に関する七つの理論』川澄英男訳、未来社、1894、45 ページ)。プラトンの人間観から、人間本性を一口に述べることは困難であろう。それに、本性について、それを生まれながらのものとしているのか否かが先ず問われなくてはならないのではなからうか。むしろ、可能的存在としてみるのが先決のように思われる。

\*Platon (427-347.B.C)、 \*\*Leslie Stevenson。

<sup>3</sup> Sokrates (470-399 B.C.)。

<sup>4</sup> animal sociale として端的に表明しているのは断るまでもない。Aristotels (384-22 B.C.)。

<sup>5</sup> Blaise Pascal(1623-62)。

<sup>6</sup> Thomas Aquinas(1225/26-74)。

<sup>7</sup> William of Ockham(c.1285-349/50).知の円と信の円は分離。

<sup>8</sup> プラトン、アリストテレスの思想を受容しえた点から考えてみたい。

<sup>9</sup> ピコ・デッラ。ミランドラ Giovanni Pico della Mirandola(1463-94)、ルネッサンスを代表する思想家の一人。Oratio, de hominis dignitate『人間の尊厳について』と題する演説草稿は生前発刊されなかった。「人間は不定の本性を持つ」、ここに「人間の尊厳と自由がある」と説く。「他の被造物のように固有の本性の中に拘束されていない」、「人間は多くの可能

性の中から自己の自由意志に基づいて自己自身の本性を選択し決定する」。すなわち、「人間の強制は自由であることの強制である」(ジョヴァンニ・ピコ・デッラ・ミランドラ『人間の尊厳について』大出哲/安部包/伊藤博明訳、国文社、1985、269 ページ参照)、サルトル Jean-Por Sartre(1905-80)の主張も色褪せる。

<sup>10</sup> K. レーヴィト\*『世界と世界史』柴田治三郎訳、岩波現代新書、1959、147 ページ参照。\*Karl Löwith (1897-73)。

<sup>11</sup> もとより原罪のみの指摘では十分ではあるまい。十字架における処刑の意味、すなわち、イエスの生と死と復活の主張を受け入れない限り、如何なる信仰もキリスト教的であるといえない。イエスにおける神の顕現と贖罪の教理は、人間の合理性に挑戦するものであり、特に死後の復活は重要である(『人間本性に関する七つの理論』、前出、65-71 ページ参照)。

<sup>12</sup> デカルト\*『省察』三木清訳、1961、岩波文庫、37 ページ参照。デカルトの人間本性すなわち本質についての断言は、同、113 ページ。\*René Descartes (1596-650)。

<sup>13</sup> Nikolaus Copernicus(1473-543), Johannes Kepler (1571-630), Galileo Galilei(1562-642)。

<sup>14</sup> デカルト哲学と自然科学、方法論の立場から問題となろう。演繹と帰納、デカルトにおいて両者が如何に関わるか、興味あるデカルトの一面である。哲学者デカルトと科学者デカルト、デカルトは大陸合理論の祖であるといわれる。経験に第一の基礎をおき、帰納法によって観察・実験を推進する自然科学の論理に、ミル John Stuart Mill(1806-73)も貢献した。

<sup>15</sup> デカルト『方法序説』小場瀬卓三訳、角川文庫、1954、52-63 ページ参照、デカルトの人間観を見事に示す。本書一卷を結ぶに当たっての言葉の内にも科学(医学)に対する関心の並々でないことが語られている、同、92-3 ページ。

<sup>16</sup> アリストテレス『形而上学』(上) 出隆訳、岩波文庫、1969、145-9、ページ参照。

<sup>17</sup> 300人からなる助手を擁して生物学の研究がなされていた。鯨目は魚類で哺乳類であることを発見してきた背景である(ピアジェ\*『哲学の知恵と幻想』岸田秀/滝沢武久訳、みすず書房、1971、60 ページ、参照)。\*Jean Piaget (1896-)。

<sup>18</sup> Gottfried Wilhelm Leibniz(1646-716), Christian Wolff (Wolf, Wolfius) (1679-754), Arthur Schopenhauer (1788-1860)。

ヴォルフは矛盾律を重視し充足理由律を矛盾律か

ら導かれると見ている。なお、原因＝結果は実在について、理由＝帰結は論理関係について言われている。

<sup>19</sup> コーエン Herman Cohen((1842-918)、フォールレンダー Karl Vorländer(1860-928)の社会主義。特に後者は、マルクス Karl Heinrich Marx (1818-83)の唯物史観および社会主義をカントの社会哲学思想によって補正修正しようと試みている。第一次大戦後の国会議員。

<sup>20</sup> 西周は『生性發蘊』(1873、明治6)に、超理学という訳語を与え、「希臘のメタ「超越」、フィシス「體即物理」より來れり」と注解している、(『日本哲学思想全書』第二卷思索編、編集者三枝博音、平凡社、1955、145 ページ)。

<sup>21</sup> Andronikos ho Rodios, 前一世紀ペリパトス学派の人。アリストテレスを初代として十一代目のリュケイオンの学頭。

<sup>22</sup> 疑義があるというが詳らかにしない。

<sup>23</sup> ラテン語の *ontologia* は Rudolf Goclenius (1547-628)あるいはスピノザ\*哲学への道を開いたといわれる Johann Clauberg((1622-65)によって用いられ始められた比較的新しい学の名称。\*Baruch de Spinoza (1632 - 77)。

<sup>24</sup> トマス『形而上学叙説』高桑純夫訳、岩波文庫、参照。

<sup>25</sup> カントの無理解者(啓蒙主義者、形而上学に無縁な人たちが《一切の破壊者》と呼んでいたとも言われる(H・ハイムゼート\*『カント哲学の形成と形而上学的基礎』、須田朗/宮武昭訳、未来社、1981、170 ページ参照)。\*Heinz Heimsoeth (1886-1975)。コーエン、ナトルプ\*\*に師事、ケルン大学教授。\*\*Paul Natorp (1854-924)。

<sup>26</sup> フォールレンデル『西洋哲学史』第二卷、栗田賢三/吉野源三郎/古在由重共訳、岩波書店、1943、373 ページ参照。

<sup>27</sup> 同上、417 ページ参照。

<sup>28</sup> この点については、即断は慎まなくてはならないであろう。検討の余地は十分ある。

<sup>29</sup> 1866 から 82 年にかけて研究され公刊されたカントの遺稿集。研究者はケーニヒスベルク図書館長ライッケ R.Reicke。カントの弟の女婿 K.Fr.Schön が保存していたのを、その女 Frau Häusel によって提供された、(高峯一愚の解説による、『カント全集』第十卷、理想社、1966、414 ページ参照)。

<sup>30</sup> 哲学史上余りに著明なコペルニクス転回は、認識論にのみ限定して考えられるべきものではあるまい。ここにおいて問題となる、直観と悟性とのかかわり、

それは、空間と時間の考察において苦心が払われているが、まさにこれこそ形而上学の問題である。この点については、現代においても変わることがない。

<sup>31</sup> 形而上学存在の意義を、諸科学の究明不可能な問題：学的前提、根拠、限界概念、あるいは、アポリアにありとして、もしそれらが不必要なら、つまり、問うに値しなければ形而上学存在の意義はないとしている(岩崎勉『哲学序章』、光の書房、1948、212-6 ページ参照)。形而上学そのものの性格がこれに反すること、それは、拙論の意図するところであり、同書 206 ページ以下「形而上学緒論」において説くところでもある。

<sup>32</sup> ハイムツ・ハイムゼート『近代の形而上学』北岡武司訳、法政大学出版会、1999、439-40 ページ。

<sup>33</sup> 同上、440 ページ参照。

<sup>34</sup> ユネスコ憲章はさらにスピリチュアルを加える。

<sup>35</sup> スキナー\*は、行動を *respond* と *operant* 行動に大別し、それぞれに対応して条件付けを、S型とR型とし、S型では専ら接近法則が、R型では強化(効果)の法則が支配するとした。\*Burrhus Frederic Skinner (1904-90)。

<sup>36</sup> John Broadus Watson (1878-968)、行動心理学の主唱者。心理学における意識を攻撃し、内観あるいは内省法を徹底的に拒否し、行動を条件反射によって理解しようとする。

<sup>37</sup> 『人間本性に関する七つの理論』、同上、155 ページ参照。著者スティーブンスンの科学哲学的立場からであることは留意しておいてよい。

<sup>38</sup> 同上、参照。

<sup>39</sup> Konrad Lorenz(1903-89)、動物行動学を確立。ノーベル賞(医学生理学賞)受賞(1973)。

<sup>40</sup> Arnold Gehlen (1904-76)、社会哲学者。Nikolas Luhmann, (1927-), Jürgen Habermas (1929-) の師。

<sup>41</sup> Mägelwesen : 生後の人間、発育過程を見れば、環境適応に巧みな他の動物に比し、このように呼ばれる、実体概念ではないとしている(A.ゲーレン『人間』-その本性および世界における位置-、平野具男訳、法制大学出版会、1992、16 ページ参照)。ヘルダー\*に由来する語、同上、92、559 ページ参照。\*Johan Gottfried von Herder(1744-803)。ヘルダーの『言語起源論』(1769)は、ベルリン王立学士院懸賞応募論文であり、この論文で Mägelwesen を用いている。なを、ヘルダーは若き日のカントの聴講生、師を熱烈に礼賛するが後年批判に転じた。

<sup>42</sup> ゲーレン『人間』、同上、34-5 ページ参照。世界開放的は非特殊化的ともよばれる。

<sup>43</sup> 同上、35 ページ。

<sup>44</sup> 同上、420 ページ参照。

<sup>45</sup> 同上、421 ページ。空隙は衝動が行為に対してとる内的距離（同、447 ページ）。

<sup>46</sup> 同上、450 ページ参照。

<sup>47</sup> 同上、451 ページ参照。もっともこれを意志と呼んで特に不都合とも思えないが、意志という語の持つあいまいさが問題である。この点、先に私見で触れた「自然」観を想起させる説明がなされている。意志という問題領域は人間全体に及んでいるので特に「心が一つの意思能力をもつとは仮定しがたい」（同上）からである。

<sup>48</sup> 同上 452 ページ。

<sup>49</sup> 同上。

<sup>50</sup> 同上、432 ページ。

<sup>51</sup> 同上、「探求は哲学的になされるほかはない」（495 ページ）の姿勢に端的に示されている。誤解を招きかねない叙述をしたが、『人間』一卷の第二部はもとより、哲学研究書である。

<sup>52</sup> 自然学の後にはじめて出番を迎える。そこに学としての形而上学が位置づけられている。ミネルバの梟は黄昏を待ってとび立つ。

<sup>53</sup> カント自身、形而上学の講義を行い、バウムガルテンの著書を参考書としている（『西洋哲学史』第二巻、前出、注および 343 ページ参照）。

<sup>54</sup> 『カント全集』、同上、402 ページ参照。

<sup>55</sup> 「人間の本性と人間性」（『世界と世界史』、前出）を参照。

<sup>56</sup> M.Heidegger\*. *Was ist Metaphysik?* Vittorio Klosterman, 1965, S.19. \*Martin Heidegger(1889-1976)。

三木清は、アリストテレスにおける第一哲学の二重規定について、「ブレンターノー (Franz Brentano, 1838-1917) に依れば、「第一哲学とは存在一般の、その根拠からの認識である」という規定によって結合される。即ち形而上学は存在一般を対象とするが、すべての学は対象の原因乃至根拠の認識である故に、それは存在の第一の原因と原理の認識を含まねばならず、かくしてそれは神学と結び付くのである」と、神学との結びつきについて、より広い見方をブレンターノーを引用して説明している（『現代哲学辞典』三木清編、日本評論社、1941、86 ページ参照）。

形而上学と神学との関わりについて、ハイデガーは、パウロの書状にある「神はこの世の知恵を愚かなるものにならしめたまざりしや」（第一コリント書状 1.20）と「この世の知恵は、ギリシャ人の求めるところのものである」（同書状 1.22）との間に立って、キリスト教神学は、哲学を愚かなるものと真剣に考えることを、なおも決断するか否か、と問うている

(Heidegger, *ibid.*)。

<sup>57</sup> Max Scheler(1875-1928)。

<sup>58</sup> 松下三省『人間とは何ぞや』、1940、125 ページ参照。他方、シェーラーは人間の行動が世界開放的 *Weltoffenheit* であると説く。環境のみならず自己をも対象化し、その生命を自由に放棄する、他の動物のなし得るところではないとして人間と動物との差異を強調する、(同、50-3 ページ参照)。ゲーレンについては既述の通り。

<sup>59</sup> 松本正夫『「存在の論理学」研究』、岩波書店、1968、11 ページ参照。

<sup>60</sup> ハイデガーが、*Was ist Metaphysik?* において、*Sein und Zeit*, の *Fundamentalontologie* を論じながら、なお、問わなければならなかった必然性も理解されるであろう。

<sup>61</sup> 全体主義の社会思想への影響（ファシズム、ナチズムなど）。シュパン Othmar Spann(1878-1950)はその一例（『近代の形而上学』、前出、426 ページ参照）。それのみではなく、時代の趨勢は、全体観に立つ人間観、世界観を二十世紀末頃より見直す傾向にある。すなわち、西洋近代思想に対する反省である。

<sup>62</sup> 同上、410 ページ参照。ディルタイ Wilhelm Dilthey (1833-1911)にとって、シュライエルマッハー\*が研究の出発、『世界観の諸類型と形而上学的諸体系におけるその形成』（1911）は主要著作の一つ。\*Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher (1868-1834)。

<sup>63</sup> 『近代の形而上学』、前出、412-3 ページ参照。オイケン Rudolf Eucken (1846-1926、ノーベル賞受賞 (1906))、生の哲学として、ディルタイ、ジンメル Georg Simmel (1858-1918)、ニーチェ Friedrich Wilhelm Nietzsche (1844-1900)、ベルグソン Henri Bergson (1859-1941) などより、方法的新しさ、深みに欠けているため現代では顧みられなくなっている。イギリスにおいては、ホワイトヘッド Alfred North Whitehead (1861-1947) が創造的形而上学を説いている。

<sup>64</sup> *Die Metaphysik gehört zur Natur des Menschen*, (Heidegger, *ibid.*, S.28)。齋藤信治『実存の形而上学』、桜井書店、1947、280 ページ参照。

(Received: September 30, 2008)

(Issued in internet Edition: November 1, 2008)